

人里のニエスレタ

日本ホテルの会 1993/10 創刊準備号



豊かな人里の創生をめざして

—第2回「ホテルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウム開催される—

日本ホテルの会の主催による第2回「ホテルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムが7月10日、東京・経団連ホールで開かれた。

シンポジウムでは、佐々 学理事長が「人と自然が共存できる豊かな自然を取り戻そう」と開会の挨拶を述べ、アルトサックス奏者でミジコ倶楽部代表の坂田 明氏による特別講演「人間と自然が同時という目線」が行われた。

日高敏隆会長の「豊かな人里を見直そう。自然を征服するという考えとは異なる、新しい価値観を広めよう」という基調講演に引き続き、企業や行政などの豊かな自然環境の保全と創生の取り組み6例が報告された。

また、共催自治体を代表して、澤 光代返子市長による挨拶がなされた。総合討論では、日本ホ

タルの会への注文も含め、活発な議論が交わされた。

今年の新しい試みとしてポスターセッションが11階の飛鳥の間で開催された。写真家の今森光彦氏のトンボやタガメなどの身近な昆虫が数多く生息する滋賀県の棚田の自然、宮城県東和町や住宅都市整備公団、企業の身近な自然を保全するための取り組み5例が展示された。

折りしも東京サミットで警備がきびしい中、また、雨にもかかわらず、北海道から九州までの全国自然環境の保全や再生に携わる行政や企業、市民、研究者、学生ら約300名が参加した。

来年の第3回「ホテルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムは、舞台を関西に移して行われる予定である。

第2回「ホテルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウム

豊かな人里の創生をめざして

—人里環境と市民、行政、企業の関わりについて—

1993年7月10日 午後1時～5時30分 経団連ホール（東京）

プログラム

開 会 挨 拶	日本ホテルの会シンポジウム開催 によせて	佐々 学	富山国際大学長
特 別 講 演	人間と自然が同時という目線	坂田 明	アルトサクソ奏者 ミジンコ倶楽部代表
基 調 講 演	豊かな人里環境の創生をめざして	日高 敏隆	京都大学名誉教授
基 調 報 告	市民レベルの環境保全活動の支援 について	森本 英香	環境庁環境保全活動推進室
報 告	企業として取り組む環境保全活動 —ホテルとビール工場—	林 万喜子	麒麟ビール(株)社会環境部
	都市河川における生物の生息に配 慮した護岸技術	高島 清光	共和コンクリート工業(株) 技術部
	身近な自然に配慮した都市開発の 進めかたについて	大石 武朗	住宅都市整備公団 都市開発事業部
	生活・産業インフラの整備と身近 な自然環境の保全について	杉 正	東京電力(株)環境部
	ゲンジボタルを通じて人里環境の 保全に取り組む	阿多 寛	宮崎県小林市役所 耕地課
総 合 討 論	うるおいのある豊かな人里環境と は		
	コメンテーター	相川 明子	鎌倉山崎の谷戸を愛する会
		大場 信義	横須賀市自然博物館
		遊磨 正秀	京都大学生態学研究センター
	総 合 司 会	矢島 稔	(財)東京動物園協会

ポスターセッション —身近な自然環境の保全と再生に関する様々な取り組み—

写真でみる滋賀県における人里環 境の変貌	今森 光彦	写真家
ホテルの生息地保全と治水のため の放水路新設	小野寺寛一	宮城県東和町中央公民館
家庭用合併浄化槽アクアトロンの 紹介	麒麟ビール(株)エンジニアリング事業部	
東京電力の地域社会の自然環境に 対する取組み	東 京 電 力 (株)	
身近な自然とふれあう住宅とは	住宅都市整備公団	

講演の概要

シンポジウムではまず、佐々 学理事長が「昔のようにどこへ行っても初夏にはホテルが見られるような豊かな日本の自然を取り戻そう」と主催者を代表して開会の挨拶を述べた。

坂田 明さんが「人間と自然が同時という目線」と題する特別講演で、「ミジンコを飼うことは、ミジンコの都合を理解すること。人は自然のバランスの中で生きており自然の一部にすぎない。また、生きるということは、命をもったものを食べること。すなわち、死の上に生があることを理解しよう」とミジンコの飼育や観察を通じて得た自然観、人生観を語った。

日高敏隆会長は「豊かな人里環境の創生をめざして」と題する基調講演で、「近代思想は自然と戦い征服することを成果として高く評価してきた。ローマへの道、万里の長城などの建築物がそれを物語っている。一方、わが国における豊かな人里の環境は自然と人とのせめぎあいの中で維持されてきたのではないだろうか。美しいこの人里環境を保全し再生するためには、これまでの自然を征服するという考え方とは異なる新しい価値観を創出しなければならない。当会では、今後様々な立場の人々の参画を求め、多角的な検討を積み重ねて新しい価値観を模索して行きたい。」との当会の設立の意義について講演を行った。

森本英香氏から今年6月から募集を始めた民間

自然保護団体などのNGOが行う地球環境保全活動を支援する目的で設けた環境事業団の「地球環境基金」についての説明がなされた。

林 万喜子氏はキリンビール京都工場のホテルが生息する庭園作りの試みが、消費者を向いたビール造りをテーマとした企業の意識の変革にも貢献していると報告した。

高島清光氏は治水を第一としながらも、自然環境を考慮し、河川を保護・育成できる護岸工法として注目されている多自然河川工法を中心とした企業の取り組みについて報告した。

大石武朗氏は自然林やせせらぎなどを残し、生き物の生息環境に配慮した住宅都市開発事業の実例をあげながら今後の自然に配慮した街づくりの試みについて報告した。

杉 正氏は、地球規模の環境問題を踏まえつつ発電所から送電線を経由し家庭に至るまでの身近な自然環境の保全・再生、都市の景観に配慮した電力事業の取り組みについて報告した。

阿多 寛氏は、宮崎県小林市において出の山湧水とそれをたたえる、ため池の保全とホテル等の小動物の保護を積極的に進めるために県営水環境整備事業および農林水産省のホテルのさとづくり事業を活用した事例を報告した。

このシンポジウムの詳しい内容については、来年早々に発行される機関誌「ホテルと人里」第2号に掲載されます。

-
- 主 催 日本ホテルの会
 共 催 逗子市・宮崎県小林市・山梨県下部町・滋賀県山東町・宮城県東和町・愛知県阿久比町・岐阜県本巣町・群馬県月夜野町・長野県辰野町・和歌山県貴志川町
 後 援 環境庁・建築省・農林水産省
 協 賛 大塚製薬(株)・関西電力(株)・(株)学習研究社・キリンビール(株)・宝酒造(株)・東京電力(株)・南都ワールド(株)・日産化学工業(株)・(株)ニッソー・(株)日野自動車グリーンファン
 協 力 日本デザインセンターグループ／(株)日本デザインセンター・(株)日本リサーチセンター・(株)日本産業映画センター・(株)中央アド新社・(株)ドレックス

シンポジウムを終えて

（財）東京動物園協会 矢 島 稔

総合司会を担当して、3人のコメンテーターと1人のパネリストに話をしてもらった。

市民が行政の計画に待ったをかけ、自発的に観察会を開き、乳幼児のための自然体験をおこなっているリーダーとして「谷戸」を守ることが日本本来の米作りの姿を伝えることだと主張する相川さんの発言には重みがあった。だから聴くものにとって、これ程説得力のある実行例はなかったのではないだろうか。

「ホテルもいるし、小動物も住める奥深い谷戸は、そこに住む者にとって、かけがえのない自然である。それを市民の手で守ることが子育ての問題でもあり、地域の特性を守る手段だと考えた。そこで、既に市が立てていた都市計画に市民の立場で意見を具申するために市民運営会議を設け、目下いろいろな面からの希望をのべている。こういう会でむしろ皆さん方から良いアイデアがあったら伺いたい」という説明だが、市民の自主的な動きが感じられて、おそらく共感を呼んだに違いない。

大場さんの長年にわたるホテルの研究の話は地域特性を知るにはその住人のこだわりに耳をかたむけ、一見無関係に見えるサンゴ礁を残すことがその島に住むホテルを守ることになる例を紹介された。わずかな緑地を残し、木を切らぬことが固有の小動物を残し人里の水辺環境を保全するのにいかに役立っているかという南西諸島の例は、まさに日本列島のどこにでもある環境問題の標本ともいえるもので、この会ならではの内容だったと思う。

遊磨さんもフィールドワーカーとして多くの経験から、「水路は人間生活に欠かせない場で、用水路は人の手になり、岸は治水上必要なものだ。しかし、いかに人工でも自然になじむ方法を用いればホテルも発生し、水の中には多様な生きものが暮らせるようになる。こうした人里環境の創造は

不可能ではなく、そこで生きものに接することが人間に大きな影響をもたらすと思う。人はこうした体験なしに自分の考えをもつことはできないのではないか」と主張された。

今森さんの滋賀県での実状のパネルには多くの人が興味をいだいたに違いない。そして、スピーカーとしては「生き物の立場で考える大切さ」を軸に、現地に前から住んで農業に携わっている人と新たに移り住んできたニュータウンの人の考えの違いをどこかで調整する必要性を述べた。また、小さな水路がつながっている事が生きものに好適な条件をつくり出していること。こういう網の目のような文字通りネットワークを維持する大切さ、モザイクのような自然を残す必要性を述べた。

日高さんは、「行政や企業の人たちもこの問題に対する関心の高いことがわかったこと。農業上の従来の方法と整備改修の必要性は共に言い分があって、どこで整合するかが問題である。今はいっしょに考える時期で、人里は見たところ美しく明るい公園のようなものであってはならない」という主旨を述べ、「この会がねらうのは人里環境であって、ホテルはたまたまシンボルとして表わしたが、一生陸上で生活するホテルもあるのを忘れないようにしたい」と述べた。

この後の討論には何人かの参会者から発言があったが、印象にのこったのは、「農業散布とホテルの復活を両立させるにはどうしたら良いのか」という地方行政担当者の質問に対して、会場から「住民が環境倫理を理解し、その地域の特性を生かすために何を優先させるべきかを考えることではないか」という意見があったことである。

また、「都市計画の策定の際、自然や生物のしくみを知っている人が加わり、そしてモニタリングすることができないか、この会がそうした受け皿になれないか」という意見もあった。

わずかな時間であったが多方面にわたる内容の発言があって、私としてはこの2回目のシンポジウムが今後のこの会の方向を示す役割を果たし、着実に歩み出したという感を深くした。

沖縄から水生の新種ホタル(仮称クメジマボタル)発見の意義

横須賀市自然博物館 大場信義

ゲンジボタルやヘイケボタルに次いで幼虫期で水中で生活する新種のホタルが沖縄県久米島から偶然に発見された。大和田守氏(国立科学博物館)と木村正明氏(那覇市在住)は、夜間に蛾を採集していたときに、たまたまこのホタルを発見したという。このホタル(仮称クメジマボタル)は、ゲンジボタルによく似たホタルである。幼虫期に水中生活するホタルはこれまでに東南アジアからいくつかの種が発見されていて、私も台湾からヘイケボタルによく似た水生ホタル *Luciola ficta* Olivier を確認しているが、クメジマボタルは水生ホタルとしては、日本では3種目ということになる。このホタルはゲンジボタルの形態や生態に酷似し、特に両種の幼虫はほとんど区別できないほどであるが、成虫は前胸背板が橙色である点でゲンジボタルとは明瞭に区別できる。

生息環境は山腹のため池から流れる川であるが、意外なことにコンクリートによる護岸が施され、人の手がかかなり加わっている人里環境である。川底には幼虫の餌となるカワニナがたくさん生息していたという。私は木村氏からこのホタルの卵を頂き、孵化させて飼育を続けている。孵化幼虫は体長約2mmで、とても小さく、2齢では約3mm、3齢で約5mm、4齢で約9mmに達し、4ヶ月間で5齢に達していて、形質はゲンジボタルの幼虫のそれに酷似する。

このホタルの発見の意義はゲンジボタルに対応するような水生のホタルが沖縄に生息することが確認されたことであり、ゲンジボタルのたどってきた道を明らかにする上で重要な比較種となっ

た。またごく身近なところにも貴重な生物が生息することを示したものであり、今後の調査によってはホタルを含めて他の生物も南西諸島にはまだたくさんの新種が発見される可能性も高いことを示唆している。

私が西表島ら発見した新種のラゴフタルムス *Rhagophthalmus* の1種は遠く離れた南アメリカに形態的に類似した種があり、これらのホタルがたどってきた気が遠くなるような永い歴史を彷彿とさせるものである。この西表島のホタルはきわめて特異な形態と習性を有するホタルの代表的例であり、古い人家の石垣や畑の土手など、昼間見ただけではとても保護の対象とならないような環境に生息する。このホタルはホタルの発光行動の進化の鍵を握る重要なものであるが、地味なために一般には注意が向けられていない。

ゲンジボタルと同様に光が強いクメジマボタルの発見はこうした人里環境の重要性を一般に分かりやすく示すものであり、今後の自然保護のありかたに一石を投じることになろう。またこのような大型で目立つ種でもこれまで発見されなかった背景には、限られた場所、時期に発生するので、発見されにくかったことがあり、南西諸島にはまた未知のことがたくさん隠されているということを象徴的に示している。

今後、クメジマボタルの幼虫を継続飼育することにより、その生活史や生態を明らかにし、さらに野外では成虫の発光パターンや遺伝的背景を含めて各地のゲンジボタル集団との比較検討も行っていきたいと考えている。

寄贈図書

図解・親子で楽しむ ホタルの飼い方と観察

大場信義 著 ハート出版 1993

ホタル研究の第一人者が、ホタルの生息環境や飼育法に

ついてやさしく解説。また、日本に生息する21種類のホタルの分布や生態についての最新の知見、情報が詳しく説明されている。

第5回ホタルサミットに参加して

環境庁国立環境研究所 宮下 衛

本年6月12日、岐阜県本巣町役場において第5回ホタルサミット本巣'93が行われた。平成元年の環境庁の「ふるさといきものの里」の指定を契機に、ホタルの保護に力こぶを入れる全国8つの町が「日本一のホタルの里づくり」をテーマに毎年開かれる自然保護と地域振興・活生化のための催しである。同サミットはこれまでに山梨県下部町、群馬県月夜野町、宮城県東和町、長野県辰野町で開催され、来年の愛知県阿久比町、滋賀県山東町、和歌山県貴志川町の順に行われ一巡する。

本巣町のゲンジボタルは、席田用水の桜堤に沿って約2kmの間で見られた。ホタルが最も多く発生する約300mの場所には、子供連れでも安心してホタル見物ができるようにと階段状の護岸と遊歩道、あずま屋が整備され、ホタルの飛翔や交尾に影響のないように配慮した夜間照明もある「ホタル公園」が昨年度までに完成。家族連れやカップルも見られた。

本巣町では、自然保護と観光事業発展を目的として席田用水付近に発生するホタルの保護条例を昭和47年に制定。町職員によるパトロール、中学生による用水の清掃活動も行われている。用水周辺の水路にはカワニナも数多く生息、ヘイケボタルも見られた。ゲンジボタル成虫の発生する5月末から6月中旬にかけての週末は、車で30分ほどの岐阜市内からの家族連れや観光客でにぎわうという。

なお、用水の生態系のかく乱を防ぐためにカワニナの放流は2年前よりやめている。

ホタルサミットは翌12日の午前9時より12時半まで本巣町役場・農業健康管理施設で開かれた。

隣町の糸貫町に住む中島洋晃氏の基調講演「源氏蛭に学ぶ水辺環境」は、ホタルの一生、席田用水でゲンジボタルを復活させるに至った歴史的背景、ホタルを取り巻く人の生活と環境などについて、自作ビデオを駆使して行われた。長良川流域のホタルの生息環境がゴルフ場や宅地開発、土地改良事業により急速に減りつつあることを危惧していた。

10時半より参加8町長によるフォーラム「これからどうする水辺環境」が行われた。本サミットに参加する町は人口が6千～2万3千人までの農業を基盤とする自治体がほとんど。各町長からはホタルの保護のために自然保護に積極的に取り組みながら、地域の振興・活性化をいかにするかについての苦労話を含めた町の紹介がされた。

広々とした体育館の会場の聴衆は、サミット参加自治体関係者が約100名、地元が約350名ほどだったが、地元側は各種団体、婦人会などの役員がほとんどで一般住民の参加がきわめて少ないのが気になった。

「水と緑に恵まれた豊かな自然のなかで、町民共有の財産として大切に保護されてきたホタルを守りたい」との共同宣言を採択し、来年開催の阿久比町にバトンを引き継いでサミットは終了した。

参加自治体の自然保護と地域振興・開発を両立させた町づくりの今後に期待したい。

寄贈図書

ホタルの水、人の水

遊磨正秀 著 新評論 1993

京都清滝川のゲンジボタルの生態の研究から滋賀県ホタ

ルダス調査に至る著者の20年にわたるホタルの調査研究の集大成。ゲンジボタル生息環境とその一生を盛り沢山のデータを交えて平易に解説。加えてホタルの環境・文化論まで幅広く言及している。

ネットワーク「ホタルと人里」その1

ホタルの飛び交うまちづくりをめざして

—横浜ほたるの会—

横浜ほたるの会幹事 後藤好正

1981年の6月中旬、横浜市の市街地にある通称大池公園として親しまれているこども自然公園内のいっかくで、飛び交う一群のゲンジボタルが発見されました。

江戸（東京）湾の一漁村でしかなかった横浜は、江戸時代末期の開港以後、日本の表玄関として発展し、現在では人口3百万人を越える大都市にまでなりました。このように開発の進んだ横浜で、ホタルが見られるところが残っているとは誰もか思ってもみませんでした。したがって、こども自然公園のゲンジボタルの発見は、市民の目を身近な自然に向けさせるとともに、横浜市環境行政をかえるきっかけともなりました。

1982年には大池公園のゲンジボタルの生息環境の調査が行われ、この発生地が横浜のかつての田園風景そのものであり、同じような環境が市内のあちらこちらに残っていることもわかりました。1983年には横浜市公害研究所（現環境科学研究所）が横浜市のゲンジボタルとヘイケボタルの分布調査を実施した結果、人々の予想をはるかに越える48地区59地点にホタルが生息することがわかりました。

この調査の副産物として生まれたのが横浜ほたるの会です。この調査には以前から地元でホタルの調査や研究、生息地の保護の活動を行っていた団体や農家、教育関係者、市の職員が参加しました。最初は「横浜市ホタル連絡協議会」として、この調査に参加した各団体の情報交換を目的に準備が進められましたが、最終的には横浜市のホタ

ルの調査・研究、生息地の保全、一般市民への啓蒙などの主体的な活動を行っていくことを目的として、1984年4月に「横浜ほたるの会」として正式に発足しました。

1985年には「ホタルの飛び交うまちづくり」をテーマにして「横浜ホタルのつどい」を開催し、シンポジウムではホタルをはじめとした、さまざまな生き物の生息する環境の必要性を広く市民に訴えました。また、このつどいにあわせて全国ホタル研究会横浜大会も開かれ、各地のホタル関係者に横浜のホタルの現状を知っていただくことができました。

現在の会員数は約60名で、主要な生息地でのホタルの発生状況の調査や観察会での講師としての市民への啓蒙活動のほか、連絡紙「螢火」を年に3～4回発行しています。また、年報「横浜螢」創刊号を今年の5月に無事刊行することができました。

1990年から横浜ほたるの会の自主調査として実施したホタルの分布調査の結果、1983年の第1回調査以後約35%の生息地が宅地開発などにより失われ、残っている生息地も公園などとして保全されている所を除いては、大変厳しい状況におかれています。これらの生息地が少しでも多く次代に引き継がれるよう、これからも活動をしていきたいと思っています。

寄贈図書

自然術①ミジンコの都合

日高敏隆・坂田 明 著 昌文社 1990

動物行動学者とジャズマンの異色の対談。ミジンコにな

りきつてみると世界がみえるという坂田氏と虫には虫の都合、論理があると考えた日高氏。生き物とのつきあい方を考えるための好著。

日本ホタルの会について

日本ホタルの会は、研究・教育・行政・自治体などのさまざまな立場で、ホタルと人里に強い関心をもっている人々により1992年4月に発足した団体です。

当会の活動の目的は、ホタルに代表されるような身近な生き物たちと共に生活できるような環境の保全および再生を積極的に、かつ、適切に推進すること。また、身近な生き物たちを、科学と文化をあわせて多面的にとらえ、我々の生活をもっと豊かな、広がりあるものにしてゆくことにあります。

身近な生き物たちの生活について、および、それらの身近な生き物たちが生息する豊かな人里環境と人の生活・文化とのかかわりについての調査研究活動を行います。さらに、それらの調査研究に基づき、それぞれの地域の特性にあった環境の保全や再生のための提言を行います。あわせて、シンポジウムや研修会の開催、映像資料や文献情報の提供、機関誌やニュースレターの発行などの普及活動をしています。

会 長 日高敏隆 (京都大学名誉教授)

理事長 佐々 学 (富山国際大学長)

機関誌「ホタルと人里」No. 1

日本ホタルの会 編集発行 1993

第1回「ホタルを通じて身近な自然環境を考える」シンポジウムの報告書。講演内容をあますところなく紹介。環境庁の身近な生き物調査、農林水産省および建設省の環境調和型の土地改良、治水事業を担当者が解説。身近な自然環境の保全、再生に取り組む人の入門・解説書。当会の機関誌としての限定版につき、会員のみに配布。購読ご希望の方は当会にご入会下さい。

日本ホタルの会では会員を募集しています

入会ご希望の方、引き続きニュースレターを購読

なさりたい方は、折込みの入会申込書にご記入の上、

事務局までFAX または郵便でお送り下さい。

人里へのニュースレター 創刊準備号 平成5年10月25日発行



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

編 集 日本ホタルの会 ニュースレター編集委員会

発 行 日 本 ホ タ ル の 会

〒104 東京都中央区銀座3-14-18 小野寺ビル5階

TEL 03-3248-3782 FAX 03-3248-3784

印 刷 (有)ア レ ス

〒305 茨城県つくば市竹園2-11-6

TEL 0298-53-8188 FAX 0298-53-8177